

Title	安倍政権の対ロシア外交における言語使用に関する一考察：「First name basis」の使用を中心に
Author(s)	セメノワ, アナスタシア
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2022, 2021, p. 81-89
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/88416">https://doi.org/10.18910/88416</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

# 安倍政権の対ロシア外交における言語使用に関する一考察 — 「First name basis」の使用を中心に—

セメノワ アナスタシア

## 1. はじめに

日露関係において日露平和条約交渉が改めて積極的に行われるようになったのは、2013年4月に日本総理大臣であった安倍晋三（以下、安倍元首相）の初のロシア訪問の以来である。安倍元首相とロシア連邦大統領のウラジーミル・ウラジーミロヴィチ・プーチン（以下、プーチン大統領）は、平和条約が存在しないことが異常であるとの認識を共有し、2018年11月14日シンガポールで行われた東南アジア諸国連合（ASEAN）関連首脳会議において彼らが在任中に日露平和条約を締結することに同意した。日露国家指導者双方は日露共同記者会見、東方経済フォーラムや日露ビジネス対話などのイベントにおける各自の演説でその意志を表明していた。しかし、安倍元首相とプーチン大統領が先導してきた日露交渉は大きな成果を生み出せず、2020年9月16日安倍元首相の辞任を機に安倍・プーチンという一つの章を閉じた。コロナ禍に伴い、パンデミック時代における国際協力の重要性が以前より高まり、安倍・プーチン時代の日露交渉を分析し、隣国である日本とロシアのこれからの交渉に貢献できるような知見を提供することが本稿の最終目的である。

日露関係の専門家の中で安倍元首相は、日露交渉においてロシア大統領との友好的関係を築くことに賭けていたという意見が存在する（Brown 2014, Кистанов 2017）。確かに、日露双方の政治的指導者の政権が長期間重なっていたため、初の訪露から2020年の辞任まで安倍元首相がロシアを11回訪問した。日本のメディアでは、プーチン大統領は日本に関心を持つ政治家として知られている。柔道の黒帯を持つプーチン大統領は尊敬する日本人として全日本柔道連盟の山下泰裕会長の名前を挙げる。安倍元首相はプーチン大統領を柔道の試合に誘ったり、東方経済フォーラムに参加したりすることでプーチン大統領との友好的関係を築く姿勢を見せた。言語的な面では、それが公的な場において安倍元首相による「ウラジーミル」といったファースト・ネームを使用した呼び方に表現されていたと言える。本稿では、このようなファースト・ネームを使用することを外交の場面に使用される言語ストラテジーである「first name basis」と名付け、それについて一考察を試みたい。

## 2. 先行研究および本研究の目的

日露関係のように相反する外交関係を良好に保持するため、長い間続いている交渉を停滞的ではなく、ポジティブに印象づけようとする意図が見られ（Bhatia 2006, Friedman & Kampf 2014）、そこに言語的な操作（verbal manipulation）が観察できる（Шейгал 2000, van Dijk 2006）。

2カ国間の交渉におけるこうした言語的な操作に焦点を当てた先行研究の中には、米中共同記者会見の批判的談話分析（Bhatia 2006）がある。彼女は、米中共同記者会見における主要なテーマを分析した結果、ポジティブティ、影響と権力、回避といったテーマとそのストラテジーについて考察を行った。それらのストラテジーを通して政治家は両国の会談が成功であったことと将来の協力も可能であるということをメディアにアピールするという。また、Bhatia (2006) は上記のストラテジーが Harris (2001) の“political politeness”に沿っていると指摘し、それぞれの制度に

よって異なるイン／ポライトネスが創造されると述べる。そのため、Bhatia (2006) によるストラテジーは、Brown & Levinson (1987) によるポライトネス・ストラテジーと関連しつつ、日常会話と異なり、外交の場面において使用される言語ストラテジーを指す。

Bhatia (2006) が見出したストラテジーの種類の中、「first name basis」は日露交渉に行けるポジティブティといったテーマを支えるポジティブ・ストラテジーに当てはまると言える。Bhatia (2006) によると、ポジティブ・ストラテジーは政治的な問題やイデオロギー的な相違が解決していない状態でも効果的に友好関係を保持していることに焦点を逸す手段であるという。また、井上(1996)によると、ポジティブ・ポライトネス・ストラテジーの場合、そのストラテジーは主に連帯(solidarity)、非形式性(informality)、親しさ(familiarity)の表明といった形をとるといふ。このことから、日露交渉を推進させようとする安倍元首相とプーチン大統領の間の連帯感および親しさを表明するため使用された「first name basis」は、成果を見せない安倍・プーチン時代の日露交渉におけるポジティブ・ストラテジーの機能を果たしていたと言えるだろう。

次に、外交交渉という実践について論じたい。石井ほか(1997)は、異文化コミュニケーションを「互いに異なる文化背景を持つ人たちの間のメッセージ交換によるコミュニケーション」(p.212)と定義する。本稿では、このことから、安倍元首相およびプーチン大統領が行ってきた外交イベントにおける対話を異文化コミュニケーションの一つとしてみなす。そこで日露双方が持つ歴史的・社会的な立場の違い、また通訳によって発生しうる障害といった問題点が日本とロシアの異文化コミュニケーションを困難にさせると言える。さらに、政治的指導者双方の演説がスピーチ・ライターによって準備されることにもかかわらず、日本とロシアの間に存在する文化的相違という問題点が相互理解に影響を及ぼすと考えられる。そのため、安倍元首相によって使用された「first name basis」というストラテジーについてロシアと日本の間の異文化コミュニケーションの視点から考察が必要であると考えられる。

以上のことから、本稿では、安倍元首相がプーチン大統領に対して使用した「first name basis」が、異文化コミュニケーションの実践のひとつである外交イベントにおいてポジティブ・ストラテジーとしての機能および効果について考察することを目指す。そのため次のリサーチ・クエスチョンを設定する。

- 1) プーチン大統領による「first name basis」の使用にはどのような傾向が見られるか。
- 2) それに比べて、安倍元首相によって「first name basis」はどのように使用されるか。
- 3) 安倍元首相による「first name basis」の使用に関しては、効果があったかと言えるか。なかった場合、どのような問題点が見られるか。

### 3. 分析データおよび分析方法

分析データとしては安倍元首相およびプーチン大統領によって行われた 2013-2019 年の日露共同記者会見／発表8回分および2016-2019年の東方経済フォーラム4回分の計839分を使用する。批判的談話研究のアプローチを援用し、安倍元首相によるプーチン大統領に対する「first name basis」という言語ストラテジーの使用例を取り上げ、その機能と効果について分析を行う。

なお、分析データとして扱う共同記者会見および共同記者発表の根本的な違いは質疑応答の有無であり、後者はそれぞれの政治的指導者による演説に限る。東方経済フォーラムとは、毎年ロシアのウラジヴォストク市に行われる国際会議であり、その主な目的はロシアの極東に投資を促すことである。

分析方法として援用したい批判的談話研究は社会的・政治的な問題に焦点を当て、社会的な相互行為および社会構造を意識しながら、説明することを試みるアプローチである(van Dijk 2015)。また、Charteris-Black (2014)によれば、批判的談話分析は、スピーカーの語彙選択、演説が行われた社会的コンテキストおよびスピーチがもたらした影響を明らかにすることで、スピーカーが狙う目的を推測することを可能にするという。このようにデータを分析する際に、Charteris-Black (2014)による批判的談話分析の段階を援用し、政治家の発言や演説の背景、コンテキストを確認し、ストラテジーが言語的にどのように表面化するかを分析し、その解釈を行う。

本稿では、まず、プーチン大統領による安倍元首相に対する「first name basis」の使用を分析し、安倍元首相による「first name basis」の分析に必要な知見を得る。次に、その比較を通して安倍元首相による「first name basis」の使用を検討し、最後に対ロシア異文化コミュニケーションの視点から安倍元首相によるポジティブ・ストラテジーの使用における問題点について論じるという形で分析・考察を進めたい。

#### 4. 分析・考察

分析データにおいては、安倍元首相によるプーチン大統領に対するファースト・ネームを使った呼び方の総計 27 件が観察できた（詳しくは表 1 を参照）。

表 1 外交イベントにおける安倍元首相およびプーチン大統領による「first name basis」の使用

	日付	外交イベント	「First name basis」の使用	
			安倍元首相	プーチン大統領
1	2013年4月29日	日露共同記者会見		
2	2016年9月3日	東方経済フォーラム	4	
3	2016年12月16日	日露共同記者会見	10	1
4	2017年4月27日	日露共同記者会見	4	
5	2017年9月7日	日露共同記者会見	2	1
6	2017年9月7日	東方経済フォーラム	1	
7	2018年5月26日	日露共同記者会見	1	1
8	2018年9月12日	東方経済フォーラム		4
9	2018年9月10日	共同記者発表		
10	2019年1月22日	日露共同記者会見	1	
11	2019年6月29日	G20 大阪共同記者発表		1
12	2019年9月5日	東方経済フォーラム	4	4
		総計	27	12

8 回の共同記者会見／発表の中 5 回、4 回の東方経済フォーラム全体会合の中 3 回という数字からは、安倍元首相が 12 回の外交イベントにおいて 8 回、イベントの多半にプーチン大統領を「ウラジーミル」と呼んでいたことがわかる。また、プーチン大統領が安倍元首相を「晋三」と呼ぶ 12 件と比べ、安倍元首相による「first name basis」の使用が 2 倍程度に頻繁であると言える。まず、

リサーチ・クエスチョン1に答えるため必要な知見を得るように分析を行う。

#### 4. 1 プーチン大統領による「first name basis」の使用

プーチン大統領による発言に関しては、ロシア大統領は冒頭演説において「господин Синдзо Абэ (安倍晋三さん)」、「господин Премьер-министр Абэ (安倍総理大臣さん)」のようなフォーマルな呼び方をすることが多く、安倍元首相を「晋三」と呼ぶことが4件しか見られなかった(抜粋1-4を参照、抜粋の日本語訳は筆者訳)。

##### 抜粋1

Это замечательное место. Я, **Синдзо**, благодарен тебе за приглашение посетить твою малую родину.

そこは素晴らしい場所です。**晋三**、私は君に、君の故郷への招待に感謝します。

2016年12月16日 日露共同記者会見

##### 抜粋2

Пригласил Премьер-министра Японии принять участие в другом крупном международном экономическом форуме – Петербургском экономическом форуме в конце мая 2018 года. И **Синдзо** наше приглашение принял.

日本総理大臣を2018年5月末にペテレブルグ経済フォーラムという他の大型国際経済フォーラムに参加するよう招待しました。そして**晋三**が私たちの招待を承諾しました。

2017年9月7日 日露共同記者会見

##### 抜粋3

Уважаемый господин Премьер-министр, дорогой **Синдзо**!

尊敬する総理大臣さん、親愛なる**晋三**!

2018年5月26日 日露共同記者会見

##### 抜粋4

Прежде всего, дорогой **Синдзо**, хочу поздравить тебя ещё раз с успешным проведением саммита «Группы двадцати».

まず、親愛なる**晋三**、「グループ20」のサミットを成功に開催したことと(君に)お祝いしたいです。

2019年6月29日 日露共同記者発表

この4件の中、2件は日本で行われた首脳会談後の共同記者発表における演説に観察され、それが日本のメディアや聴衆の前に安倍元首相との親しい関係をアピールするため使用されたストラテジーであると言える。同じく抜粋2と3では、プーチン大統領によって安倍元首相のファースト・ネームが使用されるが、その前に来る「日本総理大臣」や「尊敬する総理大臣」と言った肩書きを使った呼び方があるため、その次に来る「first name basis」は安倍元首相と距離が近いとい

うアピールに成功したとは言い難い。

一方、冒頭演説と比べ、プーチン大統領による「晋三」という呼び方が最も使用されたのは質疑応答の時間である。それは、2018年9月12日および2019年9月5日に開催された東方経済フォーラム全体会合における質疑応答の時間である（抜粋5・6・7を参照）。

抜粋5

Прежде всего хочу сказать, что **Синдзо** прав: и он, и я, мы хотим выйти на заключение мирного договора.

まず、**晋三**が正しいと言っておきたい、彼も、私も、平和条約の締結に至ることを望んでいます。

2018年9月12日、東方経済フォーラム

抜粋6

**Синдзо** сказал: давайте поменяем подходы. Давайте.

**晋三**が言いました：方法を変えましょう。そうしましょう。

2018年9月12日、東方経済フォーラム

抜粋7

Но мы действительно, и я, и **Синдзо**, мы хотим её решить.

でも私たちが本当に、私と**晋三**が、私たちが（問題を）解決したいです。

2019年9月5日、東方経済フォーラム

プーチン大統領が質疑応答の際にファースト・ネームを使用した理由は、長い間の知り合いであり、また、口語的な話し方をする司会者との質疑応答タイムが冒頭演説と比べて、ある程度フォーマルではなかったからであると考えられる。もう1つの解釈は、例えば2019年の東方経済フォーラムにおいて安倍総理大臣の冒頭演説で「ウラジーミル」と呼ばれ、平等なコミュニケーション・スタイルに合わせたことである。いずれにせよ、上記のことを踏まえ、プーチン大統領はフォーマル度が高い冒頭演説において、肩書きをつけた呼び方を用いて安倍元首相を呼ぶ傾向にあったと言える。次に、リサーチ・クエスチョン2の解に必要な知見を提供するため分析を行う。

#### 4.2 安倍元首相による「first name basis」の使用

表1からわかるように、プーチン大統領と違い、安倍元首相はフォーマル度が高い冒頭演説においても「ウラジーミル」という呼び方をより頻繁にする傾向が見られる。その例を以下で示す。

抜粋8

**ウラジーミル**、私たちの世代が、勇気を持って、責任を果たしていこうではありませんか。

2016年9月3日、東方経済フォーラム

#### 抜粋 9

ウラジーミル、大変にありがとうございます。

2017年9月7日、日露共同記者会見

#### 抜粋 10

ゴールまで、ウラジーミル、二人の力で、駆けて、駆け、駆け抜けようではありませんか。

2019年9月5日、年東方経済フォーラム

これらの抜粋を見ると、プーチン大統領に直接呼びかけるという形でファースト・ネームが使用されたことがわかる。このように、安倍元首相が公的な場でもプーチン大統領をファースト・ネームで呼ぶことができるような親しい関係がメディアや聴衆の前に表明される。

一方、安倍元首相が同じ日本人である政治家を公式な場においてファースト・ネームで呼ぶ場面は見られず、本稿で取り上げる呼び方は外交場面においてのみ使用されている。日本人政治家のコミュニケーション・スタイルについて Kim (2012) は、“A ‘personal’ name is used only in combination with gender-neutral titles or institutional titles with last name or with the full name, but never the first name alone” (p. 23) と指摘する。つまり、日本の政治家は公式な場でお互いに話すとき、ファースト・ネームだけで呼ぶことはないという。そのことから、安倍元首相によって使用された「first name basis」という戦略は、日本と異なる文化を持つ外国の政治家のコミュニケーション・スタイルに合わせようとする試みであると言える。その効果について後述で考察する。

もう一つの安倍元首相による「first name basis」の使い方として、プーチン大統領に直接話しかけることではなく、プーチン大統領と一緒に取った行動をメディアや聴衆に伝えるような形の使用が観察された（以下の抜粋 11-13 を参照）。

#### 抜粋 11

まさにこの 8 項目の協力プランというのは、ただ紙に書いたものではなくて、我々、ウラジーミルとの間で、そして両国の経済界の熱意によって魂が既に入れられたと思っています。

2016年12月16日 日露共同記者会見

#### 抜粋 12

そのような双方の動向向こうに私とウラジーミルが目指す平和条約があります。

2017年4月27日、日露共同記者会見

#### 抜粋 13

私とウラジーミルは、本年 11 月のベトナムの APEC サミットでも会談を行おうと約束しました。

2017年9月7日、日露共同記者会見

上記の抜粋では、安倍元首相は2人の政治家の行動や考えを「我々、ウラジーミルとの間で（省略）と思っています」、「私とウラジーミルが目指す平和条約」、「私とウラジーミルは（省略）約束しました」のように「団結した我々（united we）＋動作（action）」という形で代弁して話すことで、プーチン大統領との連帯感や合意を表明すると言える。また、安倍元首相が演説を行う際に、プーチン大統領にその内容に関して反対の意見を述べる機会が与えられないまま、その連帯感や合意があるかのようにメディアの前に演じられる。

しかし、冒頭演説と違い、質疑応答時には安倍元首相による「first name basis」の使用が2016年12月16日の日露共同記者会見にしか見られておらず、それ以来「first name basis」の使用が冒頭演説に限っていたことがわかる。このように、例えば、2019年東方経済フォーラム全体会合において安倍元首相が冒頭演説で「ウラジーミル」を使うが、質疑応答でファースト・ネームを使わず、「プーチン大統領」や「プーチンさん」のような呼び方に切り替えることが観察された。

上記を踏まえ、安倍元首相による「first name basis」の使用が政治家双方の間にある親しさや合意の表明を表すことを目指すポジティブ・ストラテジーの一種であることが確かめられた。また、プーチン大統領と異なり、安倍元首相は質疑応答の時間ではなく、冒頭演説において「first name basis」を最も使用する傾向があると判明した。最後に、リサーチ・クエスション3に対する解を述べるような形で考察を行う。

#### 4. 3 「first name basis」の使用における問題点

ここまで安倍元首相による「first name basis」の使用がポジティブ・ストラテジーの一種であることについて考察を行った。その結果、質疑応答の時間がある共同記者会見および東方経済フォーラム全体会合のデータから見られた安倍元首相による「first name basis」の使用には一貫性の欠如が存在すると明らかになった。一貫性の欠如というのは、冒頭演説においてプーチン大統領を「ウラジーミル」と呼ぶことに対し、質疑応答の時間に「プーチン大統領」といったフォーマル度が高い呼び方に切り替えるということである。それは、プーチン大統領による「first name basis」の使用と矛盾し、同じイベントにおける質疑応答に「first name basis」を使うプーチン大統領と使わない安倍元首相の相反するイメージが構築される。また、安倍元首相による質疑応答において「ウラジーミル」の使用例がある唯一な外交イベントは2016年12月16日日本で開催された日露共同記者会見であり、そこで日本のメディアの前に安倍元首相の故郷である長門を訪問したプーチン大統領との親しい関係がアピールされたと言えるが、しかし以降の（ほとんどがロシアで開催された）外交イベントでは安倍元首相による「first name basis」の使用が冒頭演説と違い、質疑応答の時間に維持されなかった。

なお、型式貼った冒頭演説にもかかわらずプーチン大統領をファースト・ネームで呼ぶ安倍元首相の言動からは、質疑応答の際にも同様の呼び方が使用されることが期待される。しかしながら、安倍元首相は質疑応答においてはリラックスした「first name basis」ではなく、肩書きを使った呼び方に変更しており、このような言語使用は、本来なら矛盾していると言える。聞き手となる両国民にも、矛盾したメッセージが配信されるので、本研究から観察された「first name basis」は、親密な関係を表すという目的においては成功しなかったと分析できる。

一方で、「first name basis」のように、自国の文化と異なる呼称の用い方を選択することも、思いやりの表明と考えられるが、それは「first name basis」という文化がどこの文化でも通用すると考え、言語使用の文化的多様性を軽視する画一的なものの見方を反映しているとも言える。プーチ

ン大統領は2018年「Прямая линия (ダイレクト・ライン)」という番組において「Очень со многими моими коллегами у меня сложились неформальные личные отношения. Поэтому, скажем, с Премьером Японии мы друг к другу обращаемся по именам и на «ты», с канцлером ФРГ, с Президентом Франции. (多くの私の同僚とインフォーマルで私的な関係が構築されました。なので、例えば、日本総理、ドイツ首相、フランス大統領と互いを名前と呼んだり、「ты」(ロシア語の2人称単数代名詞)を使ったりします。)」と述べた。このことから、安倍元首相と「first name basis」を使って話すことが認められるが、公的な場ではロシアのエチケットに従い、肩書を使った呼び方を守る傾向があるプーチン大統領との比較で、安倍元首相の冒頭演説で使用される「first name basis」はロシアの文化的慣習を無視した一方的なものに見えて、その結果親しさや友好関係の表明として失敗し、異文化コミュニケーションの視点からは功を奏さなかったと判断できる。

## 5. おわりに

本稿では、「first name basis」の使用例を中心に、安倍政権の対ロシア外交における言語使用に関する一考察を行った。まず、ここで取り上げた「first name basis」はポジティブ・ストラテジーの一種であると証明し、その機能として連帯感や合意の表明を表すことについて議論した。また、安倍元首相による「first name basis」の使用をプーチン大統領による使用例と比べ、安倍元首相によるポジティブ・ストラテジーとしての「first name basis」が功を奏さなかったと明らかにした。

その理由として、第一に、外交においてポジティブな言語ストラテジーが功を奏さなかったという結果に至った「一貫性の欠如」という問題点が観察できた。第二に、異文化コミュニケーション上の問題として、安倍元首相による「first name basis」の使用は外交の場に文化の多様性を軽視した画一的な判断を持ち込んだことが明らかになった。

このように、本稿では安倍政権の対ロシアの外交ストラテジーとして使用された「first name basis」の機能およびその効果について考察を行った。本稿の分析を通して、一貫性がないポジティブ・ストラテジーの使用は、聞き手となる相手の政治家および両国民に矛盾するメッセージを表明し、相互理解を困難にさせることが分かった。このように、日露交渉におけるポジティブティへ異なるアプローチを行なった安倍・プーチンのタンデムは、約30回会ったことがあるにもかかわらず、日露関係を強化するための表現においても合意を見せずに失敗したと言える。本稿では日露交渉における相互理解の向上に必要な知見の一端を提供できたと考える。

今後、引き続き、本稿で示した分析手順を援用し、他の言語ストラテジーの働きおよび効果について考察を行うことで、異文化コミュニケーションの1形態である日露交渉における言説の問題点およびその理由についてより深い分析ができると期待する。

## 参考文献

- Bhatia, A. (2006). Critical discourse analysis of political press conferences, *Discourse & Society*, vol. 17(2), pp.173-203.
- Brown, J. D. J. (2014). Hajime!—The Causes and Prospects of the New Start in Russian-Japanese Relations. *Asia Policy*, vol. 18, pp. 81–110. <http://www.jstor.org/stable/24905280>.
- Brown, P. & Levinson, S. C. (1978). *Politeness: Some Universals in Language Usage*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Charteris-Black, J. 2014, *Analyzing political speeches: Rhetoric, discourse and metaphor*, Palgrave

Macmillan.

Friedman, E., Kampf, Z. (2014) Politically speaking at home and abroad: A typology of message gap strategies, *Discourse & Society*, vol. 25(6), pp. 706-724.

Harris, S. (2001). Being Politically Impolite: Extending Politeness Theory to Adversarial Political Discourse, *Discourse & Society*, vol.12(4), pp.451-72.

Kim, A. (2012). Power and solidarity as observed in the forms of address/reference in Japanese political discourse: focusing on selected samples from the Minutes of the Diet (2001-2005) in BCCWJ, *Japanese and Japanese Language Education, Center for Japanese studies, Keio University*, vol.40, pp.19-47.

van Dijk, Teun A. (2006). Discourse and manipulation, *Discourse & Society*, vol. 17(3), pp. 359-383.

井上逸兵、1996、異文化間のミスコミュニケーションとポライトネスモデル、*Studies in Humanities*, 信州大学 vol.30, pp.13-32.

石井敏・久米昭元・遠山淳・平井一弘・松本茂・御堂岡潔編、1997、『異文化コミュニケーション・ハンドブック』、東京：有斐閣

内閣官房長官記者会見 ([https://www.kantei.go.jp/jp/tyoukanpress/201809/12\\_p.html](https://www.kantei.go.jp/jp/tyoukanpress/201809/12_p.html) 最終閲覧日：2021年11月25日)

Кистанов, В.О., 2017. Узловые проблемы внешней политики Японии в 2016 - начале 2017 г., *Ежегодник Японии*, vol. 46, pp. 7-25.

Стенограммы пресс-конференций Президента РФ. (Retrieved 2021.11.25 from [http://kremlin.ru/events/president/transcripts/press\\_conferences](http://kremlin.ru/events/president/transcripts/press_conferences)).

Шейгал, Е. И. (2004). *Семиотика политического дискурса*, Москва: Гнозис.